

—人口約1,500人、職員約60人—

高齢化が進む小さな村だから生じる課題を解決し、村民の暮らしやすい環境を提供したい。そんな思いから提案*した島牧村の及川光輝 課長、内閣府地方分権改革推進室で提案を担当した浅田裕亮 調査員に1年間を振り返ってもらいました。

※介護サービスのスペースの共用に関する提案（平成28年管理番号28（詳細はP38）をご覧ください。）



島牧村
福祉課
課長 及川光輝氏

内閣府
地方分権改革推進室
調査員 浅田裕亮
（滋賀県から派遣）



“なんとかしなきゃいけない!”と思った”

—事前相談しようと思ったきっかけを教えてください。

及川：福祉課には、28年に異動してきたばかりで、正直、制度や現場の実態がしっかり把握できていないわけではなかったですが、村、社会福祉協議会、事業者との打合せで経験豊富な方々が今回提案した件について悩んでいることがわかり、仮に今の制度で「モノ」を作ることができても、「ヒト・カネ」的に無理があるだろうと思い、「なんとかしなきゃいけない!」と内閣府分権室にメールしました。今思うと見切り発車の感じはありますが、あまり難しく考えず、まずはやってみようという性格なので(笑)。

浅田：その思いがきっかけになったのですね。相談が来たときは「村から来たよ!」とか「島牧村ってどこにある村?」と盛り上がったことを覚えています。

“提案の裏にある想いを伝える”

—印象に残っている点を教えてください。

及川：やはり、事前相談の時が印象に残っています。浅田さんから「まずはどういったことに困っているのかを整理しましょう」と言われたので、分からないことがあれば介護サービス事業所の人に何度も話を聞きに行きました。

浅田：私も28年に異動で内閣府分権室に来たばかりで手探りの毎日でしたが、島牧村が本当に悩まれていることがやりとりの中で伝わってきたので、村や及川さんの真剣さ、想いが厚生労働省に伝わることを意識して進めました。

及川：二人とも新人のような状況で「この制度はどうなっているのだろうか?」とか色々と頭を悩ませながら支障事例を掘り下げていきましたね。



—提案を進めていく中で苦労した点を教えてください。

浅田：島牧村には簡単に現場を見に行くことができないので、支障をイメージすることに苦労しました。

及川：現場の状況を把握する中で大変なこともありましたが、浅田さんに支障事例を丁寧に聞き取ってもらい、論点を整理してもらったので助かりました。提案募集方式は、単に内閣府分権室が間に入るのではなく、地方側と同じ方向を向いて一緒にやっていくものと感じました。振り返るとあまり苦労した点はないのかなと思います。

浅田：提案団体ヒアリングの後に顔を合わせて、提案の実現が村にとっていかに重要か伝わるように作戦を立てましたね。直接会って色々と話ができたので、支障事例に対するイメージがより一層わかりました。

及川：伝えたいことはたくさんありましたから、実際にお会いできて良かったです。(笑)

—提案団体ヒアリングで東京に来るのは大変だったのではないですか。

及川：提案が実現するなら、どこにでも行きますという気持ちでした。待合室で他の自治体の人と会話できたこともよかったです。ただ、7月の東京は暑かったです(笑)。

浅田：私も今日初めて島牧村まで来て、街中で除雪する姿を見て驚くとともに、東京との違いを肌で感じました。

“本当にできるようになるとは思ってなかった。実現して本当によかった”

—提案が実現した訳ですが、どのようなお気持ちですか。

及川：事業所の職員から喜んでもらったのはもちろんですが、後志広域連合からも「他の町村の役に立つよ」と言われてうれしかったです。国は組織も大きく、すぐに動いてくれないイメージがあったので、こんなに早く通知が改正されるとは思っていませんでした。

浅田：厚生労働省からの1次回答が、実現に向けた前向きな回答だったので、次はいかに迅速に厚生労働省に対応していただくか、ここはかなり厚生労働省と調整しました。迅速に対応する必要性が厚生労働省にしっかり伝わったので、よかったです。

及川：12月に近づくにつれ、やりとりのペースが上がり、いよいよ大詰めなんだと感じたことを覚えています。

浅田：1年間の決まったスキームの中で対応していくのは、提案募集方式ならではのかもしれませんね。

—浅田さんは、

浅田：役場に来る道中、及川さんに「100回の電話よりも1回見てもらえたらよくわかりますよ。」と言われましたが、実際に介護サービスの利用者の方々が楽しく過ごす姿をみて、提案が実現して本当に良かったと思いました。今日はお忙しい中ありがとうございました。